

124

二〇一四年度入学試験問題（第一回）

国語（五十分）

【注意】一 この試験の問題文・設問は、1ページから12ページに印刷されています。

二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。

三 文字は、正しくきちんと書きなさい。

四、。「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

由美は、夫の悟を病気で亡くし、息子の茂と二人で暮らしている。一ヶ月程前、由美は少年野球の試合をこっそり見に行き、そこで雑用ばかりで試合に出ていない茂を見る。それでも野球の話を楽しそうにする茂を見て、由美はもう一度試合を見に行く。

グラウンドには一ヶ月前に見に来た時よりも大勢の子供たちがいた。

夏休みに入ったということもあるだろうが、大人たちの数も先日来た時より多かった。

由美は息子のチームのユニホームを探した。チームはグラウンドの外にあるちいさな空地にいた。

茂の姿が見えた。キャッチボールをしていた。試合前のウォーミングアップというところなのだろう。茂のキャッチボールの相手はひどく小柄な子だった。キャッチボールをしていて、その子の投げるボールがしょっちゅう外に落ちて、その度に茂がボールを拾いに行っている。茂の投げるボールは山なりだけど、ちゃんと相手の子に届いてい

る。

——どうしてあんな子とキャッチボールをするんだろう。

しかしグローブを手にしてボールを投げている息子の姿は雑用をしている時よりまぶしく見えた。

試合がはじまった。また茂はベンチにいる。由美は眉間にしわを寄せた。もし今日もずっとベンチにいるようだったら茂に、

——無理をして野球に行かなくてもいいのよ。

と話してやろうと思った。

バットを片付けて、ヘルメットを並べて、グローブをレギュラー選手に運んでいる。ゲームの間中ずっと茂はそれを続けていた。

——そうだ、あの監督に茂がどうして一度もゲームに出してもらえないのかを聞いてみよう。

由美はその方が先決だと思った。ベンチの中央に座っている監督の顔を見た。この間見た時より若く見える気がした。

(中略)

由美が公園で待っていると、前掛けを外した冷泉が急ぎ足でやって来た。

「すみません。おふくろがもう耳が遠くて、ちょっと出かける」と説明するのが大変なんです」

「よかったですか、店を放ったままで」

「牛乳屋は朝で仕事の半分は終るんですよ。おやじの代の時のようにいろいろは、やってませんから……、で、お話と言っのは」

こうして間近に冷泉に接してみると、由美は自分が考えていた印象と彼が違った人柄のように思えてきた。

「親馬鹿だと思うんですが、実は私、先月から二度ばかり息子の野球の試合を見物に行っただんです」

「お見えになつてたんですか。ベンチの方へ来て下さればよかったのに」

「いえ、仕事へ出かける前にちよつとのぞいただけですから……。それで私息子の野球を見ていて」

そこまで言つて、由美は言葉を切った。

「で、何ですか」

「ごめんなさい。息子は毎日野球に行くことを私の目から

んです。私は一年生ですぐマウンドに立ちました。スピードはあったのですが、どうも頭が悪くて一年の時は先輩に迷惑をかけました」

と太い指でこめかみをさして笑った。

「――夏の甲子園地区予選を三回戦で敗れた後で、先輩が私を呼んで『冷泉は将来プロ野球へ行きたいのか』って言われたんです。私がそうですと返事をするとおまえならきつとプロの選手になれるよ、がんばれ』と言われてから最後に『冷泉、野球ってスポーツはいいだろう。俺は野球というゲームを考え出したのは人間じゃなくて、人間の中にいる神様のような気がするんだ。いろんな野球があるものな。おまえにもそのことをわかって欲しいんだ。自分だけのために野球をするなよ』って……、何か変な事を言う人だなんて、その時は思いました。正直に言う、自分にはエースの座を奪われたくやしさを最後に話して行っただろうかって。私は甲子園に行くことができずに、ノンプロチームに入りました。そこからプロ野球を目指しました。ところが二年目につまずきました。それでもなんとかプロへと三年頑張りました。プロのスカウトも様子を見に来てくれました。しかし上手く行きませんでした。野球以外は

見ても、とても楽しみにしていました。きっと野球が面白くてしようがないのだと思っていましたから、どんな野球をしているのかと思つて出かけたんです。そうしたら息子は試合にも出られず、バットを片付けたりグラウンドの石を拾ったりと、なんだか息子が可哀相になりまして……」

「そうでしたか……」

冷泉はシャツのポケットから煙草を出して火を点けると、

「そうでしょうね、奥さんがおっしゃることはよくわかりますよ。私もずっと野球をやっていたんですが、私の野球に対する考えも奥さんと同じだったんです。私は子供の頃から野球選手になることだけが夢だったんです……」

と煙りを吐き出しながら話をはじめた。

「――辛い親からもらった身体も同じ歳の連中より大きかったですし、好きだったスポーツだから上達も早かったんでしょう。高校へ入った時はもうプロ野球へ行くことしか考えていませんでした。私が一年生で野球部へ入部した時のキャプテンが奥さん、あなたのご主人だった小田先輩です。小田先輩も神奈川県下では 投手でした。でも先輩はエースの座を監督さんに話して私に譲ってくれた

何もできない人間でしたから、遊ぶようになって、半分グレたような暮しになりました。そんな時に先輩が訪ねて来ました。『帰って来い冷泉、田舎へ帰ってまた野球をやる』と言われました。野球はもういいですよって、私が言ったら『そうだろう、つまらない野球はもうやめろ。神様がこしらえた野球をやるうや』と笑つて言われました。それから半年先輩の言ったことを考えて、田舎に戻って来ます。高校の監督も三年やらしてもらいました。甲子園へは行けませんでした。それだけが高校野球ではないこともなんとなくわかりました。そして何より楽しかったのは先輩たちとやった草野球でした。自分はもし先輩に逢うことがなかったら、きつとつまらない野球をした男で終っていたでしょう。そんな野球と出逢ってから、この町がひどく好きになったんです」

冷泉は空を流れる雲を眺めながら話を続けた。

「先輩に病室に呼ばれたのは、手術が終わってから二週間たった時でした。自分には先輩はひどく元気そうに見えました」

冷泉が言っているのは、悟が手術後二週間して一度驚くほど回復した時のことを言っているのだと由美は思っ

た。

「先輩は自分に『俺の息子がもし野球をしたいと言いはじめたら、冷泉、おまえが教えてやってくれ』と笑って言われました。私は先輩の息子だとおつかないと言って、先輩が教えた方が上達しますよと答えました。『冷泉、おまえの野球にはもう神様がついてるよ。頼んだぞ』って手を握られました。その時自分は先輩の身体がそんなだったとは気づかなかったんです。つくづく自分は馬鹿だなんて思いました。いつもあとになって、わかるんですから……」

冷泉の目がうるんでいた。それよりもスカートを必死で握りしめて涙をこらえていた由美の手の甲に大粒の涙が堰を切ったようにこぼれ落ちた。

「かんべんして下さい、奥さん。辛いことを思い出させちゃって」

「す、すみません……」

言葉は嗚咽にしかならなかった。

「すみませんでした。何も知らないで」

「もうすぐですよ。もうすぐ小田三墨手もゲームに出られるようになります。先輩の話をすると小田君は目がかがやきます。佐々木さんが『小田は目がいい』と誉めていました。」

ベランダの方から茂の声が聞こえた。由美は仕事の手を止めて障子を開けた。雲の切れ間から、九月の夕日がベランダの手すりに頬杖をついている茂の身体をつつんでいた。ひとつ夏を越えると、息子の背丈が少し伸びたような気がした。

「本当に晴れたわね」

由美の声にふりむいた茂の顔にうらめしそうな表情が残っていた。

「ねえ、ママとキャッチボールしようか」

「本当に、ママ、キャッチボールできるの」

「できるわよ。パパからの直伝ですもの」

「よし、なら外へ行こうよ」

茂の声がはずんだ。

「よし、そろそろ小田三墨手」

二人は堤の道を歩いて河原に行った。

「行くよ」

「いいわよ」

素手で受けてみると思ったより茂の投げるボールは重かった。

「痛い」

た。会長さんですがね、先輩に野球を教えた人です。名選手にならなくなったっていいんですよ。自分のためだけに野球をしない人間になればいいと思っています」

由美は立ち上って冷泉の前に起立すると、

「本当にすみませんでした。茂をよろしくお願いします」

と言って公園を飛び出した。

茂が楽しみにしていた日曜日のゲームが雨で中止になった昼下り、由美はベランダにもうひとつテルテル坊主を吊して、仕事部屋でセルの色塗りを続けた。

——ベースボールというのは人間にいろんなことを教えてくれるものです。いい息子さんだ。

挨拶に行った時の佐々木の顔が浮んだ。

——私は小田悟のベースボールが好きでね。

しわがれた老人の声はそのまま父の声に変わった。

——そうしたいのなら仕方あるまい。

盆に実家に帰った時に父はそう言った。父は退職金の一部であろろ金を黙って由美に差し出した。

雨雲は少しずつ海の方へ流れていた。

「ちえ、今頃になって雨がやんだよ」

「グローブを貸そうか」

「平気、平気」

手のひらの痛さは息子の重さだと思った。

それでも茂はグローブを渡してくれた。

「いいのよ、そんなにやさしく投げなくたって」

「いいよ」

やさしい子なのだと思った。とんでもない場所へ由美がボールを投げてしまっても茂はそれを走って拾いに行き、やわらかなボールを返してくる。それがどこか頼もしくて、無性に嬉しかった。

茂のボールを取りそこなって、由美は草むらを走った。

草の中の白いボールを拾おうとした瞬間、

——いつかこいつとキャッチボールができるかな……。

その言葉はふいに由美の耳の奥に聞こえてきた。甘い匂うようなささやきだった。

由美は思わずボールを持ったまま空を見上げた。

「どうしたの、ママ」

そこには青空が鰯雲を西へ押しながらかひろがっていた。空がふくらんでいるように思えた。どこかで草が風に鳴る音がした。すると雨垂れがひと粒頬に落ちてきたよ

うに冷たいものが目尻から耳たぶにこぼれた。

「どうしたの、ママ」

「なんでもないの」

由美はグローブで濡れた頬をぬぐうと右手をぐるりと一

周回してから、身構えている息子にむかって、笑いながら
白球を投げた。

(伊集院静「夕空晴れて」による)

問一 ― 線部A「雑用をしている時よりまぶしく見えた」、―― 線部B「私の野球に対する考えも奥さんと同じだったんです」

とあるが、由美と冷泉の野球に対する考えはどこが同じだったのか、説明しなさい。

問二 に入るのに最もふさわしい表現を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 足がつく イ 頭打ちの ウ 息をのむ エ 指折りの

問三 ― 線部C「神様がこしらえた野球」とは、どのようなものか、説明しなさい。

問四 ― 線部D「俺の息子がもし野球をしたいと言いはじめたら、冷泉、おまえが教えてやってくれ」とあるが、どうして悟は、息子に野球を教えるのが冷泉でなければいけないと考えたのか、説明しなさい。

問五 ― 線部E「うらめしそうな表情」とあるが、茂はどうしてそのような表情をしたのか、説明しなさい。

問六 ～～ 線部I「ごめんなさい」と、～～ 線部II「本当にすみませんでした」について、悟の野球に対する思いをふまえて、由美の中の心情の変化を100字以内で説明しなさい。

問七 ― 線部F「いつかこいつとキャッチボールができるかな……。その言葉はふいに由美の耳の奥に聞こえてきた」とあるが、このとき由美に悟の声が聞こえてきたのはなぜか、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 息子の成長を感じ、もうキャッチボールのできる歳になったことに気づかされたから。
イ 悟の好きだった野球への思いが息子の茂へも確実に引き継がれていると感じたから。
ウ 由美自身が茂とキャッチボールをするなんて、二ヶ月前までは思ってもいなかったから。
エ 草むらの中のボールを拾いながら、悟がもうこの世にはいないことを思い知り絶望したから。
オ 茂とキャッチボールをすることで、かつて悟とキャッチボールをしたことを思い出したから。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

朝日新聞がCM用のコピーで「言葉のチカラ」というフレーズを使っていた時期がある。「私たちは信じている、言葉のチカラを」というコピーにはかなり反響があつたようで、多くの媒体で使われていた。

もちろん、私も物を書く仕事をしている以上、言葉のチカラすなわち言語情報を「ケイシ」するつもりはない。

「1」「言語情報がすべて」ではないのである。

言葉は「伝達的手段」であると国語の授業で教わった。しかし、「言葉の意味」を伝えただけで「伝えた」ことにはならない。

「どんなしゃべり方で」「どんな表情で」「どんな姿勢で」「どんなアクションで」伝えるかによって、伝わり方は天地ほど違う。

こんな例を考えていただきたい。

日本史の授業が上手いことで「テイビヨウ」のあるX先生がいる。X先生の授業をワープロで文章化し、音声ソフトで、カーナビの音声案内のような気持ちのこもらない声で、別のクラスの生徒に聞かせたとする。

物、触るもの……すべては非言語情報である。これについては後でまた詳しく述べる。

言語情報と非言語情報は、その特徴と取り扱いが異なる。それぞれに得意分野、不得意分野があり、それに合わせて、上手に付き合っていくと、コミュニケーション能力はコウジヨウしていくはずである。

会社や学校に通っていると、私たちはつい言語情報のほうに重きを置いて考えてしまいがちだ。少し、回りくどい話をさせていただく。

たとえば「時計」という言葉について考えてみよう。

時計には、色んな種類がある。腕時計、置き時計、壁掛け時計、柱時計。色もさまざま。【2】、形状も丸や四角だけでなく、五角形のものもある。デジタルかアナログか、秒針付きか無しか、など言葉で説明すればきりがなほどの「違い」がある。

日常会話で、それほど厳密に相手に伝える必要がなければ「時計」とだけ言えばいい。普通は、それで十分こと足りる。

ところが、あなたが不幸にも何らかの嫌疑をかけられてアリバイを証言しなければならない立場になったとする。

「X先生の授業」と「音声ソフトの授業」では、伝えられる言語情報は同じである。しかし、伝わった情報量が天と地ほど違ってくることは誰でも想像できるはずである。言葉以外の情報量、つまり「非言語情報」の量が圧倒的に違うのである。

非言語情報は、今まで重視されてこなかったもので、その大きさ、重要性が認識されていない。少し驚かされるかもしれないが、私たちが接している情報の中で「純粋な言語情報」というものは存在しないのである。音声であれば、声の質、大きさ、テンポ等々の「非言語情報」の要素が大きいことはX先生の例の通り。「活字は純粋な言語情報では？」と思うかもしれないが、決してそんなことはない。活字の種類、大きさ、行間、紙の色・質等々、やはり「非言語情報」が含まれている。それらをすべて排除してしまうことはできないのである。

仮に、朝日新聞の記事が現在の紙面・活字ではなくて、ピンク色の紙に手書きの丸文字で掲載されていたらどうだろうか。「言葉のチカラ」は激減するはずである。

一方で「純粋な」i「はいくらでもある。というより、むしろそのほうが世の中には多い。風景、音楽、食べ

事件があつた時に、あなたがいた部屋には大きな目立つ時計があつた。部屋には他のものはほとんどなかったとしよう。【3】「実際に見たなら、ある程度はどういう時計かを説明することが出来るだろう。「壁掛けなのに大きなデジタル表示の時計で、ちよつと珍しいな、と思ったのでよく憶えています」という具合である。

もし、本当は現場を知らなくて、友人に聞いた「あの部屋には珍しい時計がある」というシンプルな情報だけを手掛かりに嘘の証言をしようとすれば、説明ができなくなるはずである。どういう時計だったか説明できなければ、「証言が曖昧だな」と受け止められてしまう。

「時計」という言葉（言語）は、「時間を表す道具」という意味を持っている。色んな種類の時計の、「時間を表す」という本質的な部分を表現している。難しい言葉で言うところ「概念化」という。昔の人が「時間を表す道具はすべて「時計」という言葉で表そう」という約束を作ったのである。

言葉は「概念」を伝えることに秀でている。しかし、色や形状のような情報を言語で正確に伝えるには、膨大な情報量をヨウすることになる。数十行分の文章を費やしても、時計の外観を正確に第三者に伝えられるかどうか。

「**〈D〉**」という諺^{ことわざ}がある通り、言葉をいくら費やすよりも、非言語情報は正確に対象の形状を伝える。非言語情報は「直接的」に、言語情報は「間接的」に情報を伝えると言ってもいいだろう。

^E 言語は「伝達の道具」ではあるが、情報伝達のための「万能選手」ではない。

というわけで、私たちは、言語情報と非言語情報の特徴を知り、道具として使い分ける必要がある。

この辺りが「情報」という言葉で一緒^{いっしょ}くたにされると、混乱を招いてしまう。一度整理してみるとわかりやすくなる。

二〇一一年三月十一日。日本は東日本大震災^{だいしんさい}という大きな災害に見舞^{みま}われた。私たちをテレビの画面に釘付けにしたのは、津波^{つなみ}の恐ろしい映像だった。巨大な船が波に押し上げられて、内陸まで押し流される。町が丸ごと濁流^{だくりゅう}にのみ込まれる。ヒツゼツ^⑤に尽くしがたい、とはまさにこのことだ。

映像という ii でなければ、あの津波の威力^{いりよく}は伝わりにくいのではないか。

後になって、災害の専門家はあの津波を「想定外だった」

と言った。

しかし、文書では、三陸沖^{わき}を同じクラスの津波が襲^{おそ}っていたことは、わかっていたのである。吉村昭氏の手になる聞き書き『三陸海岸大津波』もちゃんと記録として残されていた。だから「想定外^F」と言った人たちは批判もされたのである。

しつかりと iii として残されていたはずの「津波の恐怖^{きょうふ}」は、なぜ「想定外」になったのだろうか。私には、過去の三陸大津波に関しては、言語情報は残っていても、非言語情報が残っていなかったことと無関係ではないように思われる。つまり映像を見ない限り、実感として「わかつていた」人は少なかったのではなからうか。

もちろん、専門家が「映像はなかったので想定できませんでした」などと言うべきではない。それでもやはり、言語情報だけでは不十分な面もあったと知るべきである。

(竹内一郎『やっぱり見た目が9割』による)

問一 **【 1 】** **【 3 】**にあてはまることを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ つまり ウ だから エ また

問二 — 線部A「しかし、伝わった「情報量」が天と地ほども違ってくる」とあるが、筆者の考えるその違いの理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 録音^{ろくおん}した音声では変化に乏^はしく眠^{ねむ}くなるから。

イ 録音した音声では人間の温かみが伝わらないから。

ウ 音声ソフトだけだと話す先生の好き嫌い^{きらい}が影響^{えいきやう}しないから。

エ 音声ソフトだけでは伝え手の表情によるメッセージがないから。

問三 — 線部B「朝日新聞の記事が現在の紙面・活字ではなくて、ピンク色の紙に手書きの丸文字で掲載されていたらどうだろうか。「言葉のチカラ」は激減するはずである」とあるが、なぜ激減するのか、理由を説明しなさい。

問四 — 線部C「それぞれに得意分野、不得意分野があり」とあるが、言語情報、非言語情報の得意分野について解答欄^{とうかいらん}に合うように、それぞれ文中から五字以内で抜き出しなさい。

問五 i iii には、アⅡ言語情報、イⅡ非言語情報のいずれかが入る。あてはめるのに適切な方を選び、記号で答えなさい。

問六 「〈D〉」にあてはまる諺を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一を聞いて十を知る イ 百聞は一見に如かず ウ 目は口ほどにものを言う エ 論より証^{しょうこ}拠

問七 ―線部E「言語は「伝達の道具」ではあるが、情報伝達のための「万能選手」ではない」とあるが、「伝達の道具」の意味を考えた上で、「万能選手ではない」理由について七十五字以内で説明しなさい。

問八 ―線部F「想定外」と言った人たちは批判もされたのである」とあるが、なぜ専門家たちは批判されることになったのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 専門家たちは書かれた記録による知識は豊富であつたけれども、現実の津波の危険に対する経験がなかったから。

イ 専門家たちは書かれた情報では津波の大きさを知つてはいたが、その恐ろしさを実感できるまで理解できなかったから。

ウ 専門家たちは書かれた内容があつたにもかかわらず、津波に対する防災の方法を具体的に情報として伝えなかったから。

エ 専門家たちは書かれた言葉による情報を信頼するあまり、それ以外の情報を無視して津波の恐ろしさを判断していたから。

問九 〰線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

二〇一四年度

国語解答用紙

（第一回）

受 験 番 号

点 評	
一	
二	
総 点	

④	①
する	
⑤	②
	③

[illegible]

i			
ii			
iii			

問六

を伝えること。 非言語情報

	1
	2
	3

問
一

--

[illegible]

問
